

伊勢長島藩第五代藩主 増山正賢(雪斎)の『虫豸帖』と 生命観に関する考察

岡田 真美子, 中峰 空¹

人間環境部門, 三田市有馬富士自然学習センター¹

An Examination of "Chuchi-jo" painted by Masakata MASHIYAMA,
the fifth lord of the Isenagashima clan and his view of life.

Mamiko OKADA, Hiroshi Nakamine¹

School of Human Science and Environment,

University of Hyogo,

1-1-12 Shinzaike-honcho, Himeji, 670-0092 Japan

Sanda Municipal Aniramuji Nature Study Center¹

Abstract: In Japan, many "Natural History Drawings"(博物図譜) were produced after the mid-19th century, Edo era. It is thought that there was the historical background such as a policy of product by Shogun Yoshimune TOKUGAWA. These kinds of Natural History Drawings are not only administration records. They brought many people of this time intellectual curiosity to the natural object. Also during this period, illustrated books of insects were produced. It is thought that the original purpose of to produce their books was to correct record and to depict for administration documents, but the expression method of Natural History Drawings was assimilated into some professional painters like Oukyo MARUYAMA. In this paper we would like to examine about Sessai MASHIYAMA's view of life and Natural History Drawings. He is the 5th lord of the Isenagashima clan, and drew the illustrated book / Natural History Drawings "The insect quire"(虫豸帖).

Keywords: illustrated books of insects, Masakata MASHIYAMA, view of life

1. はじめに

江戸中期, 18 世紀半ば以降非常に多くの博物図譜が盛んに制作された. この時代背景として, 将軍徳川吉宗の物産政策があったと考えられている. 徳川吉宗は種々の産物の国内供給を目的として, (1)採葉使の派遣, (2)全国的な動植物調査, (3)海外産動植物の調査, (4)海外産植物の国産化の 4 点を推し進めた. 博物学史においては, (2)の全国的な動植物調査が重要な意味を持つ. この調査は「保元文全国産物調査」として 1735 年-1738 年に行われた. 幕府は各藩に対し, 産出する動植物の品名を利用の有無に関わらず報告させたとされている(国立国会図書館 電子展示会「描かれた動物・植物 江戸時代の博物誌」). このような動植物調査は幕府の命である行政記録に留まらず, 博物学的・生物学的な知的好奇心を自然物に向け始めるきっかけになったものと考えられる.

さらに同じ頃, 顕微鏡が日本に伝来したことが知られている. 顕微鏡の日本への正確な伝来時期は明らかになっていないが, 本草家の後藤梨春が著した『紅毛談』(1765 年)に「虫めがね(顕微鏡)」の記述があることから, 18 世紀半ばには伝来したと考えられている(森, 2008). この「虫眼鏡」或いは「顕微鏡」の存在は当時の観察者の視覚に多大な影響を与えたはずである. 顕微鏡を使

用することで詳細な形態の観察が可能となり, 観察者が様々な生物の外部形態や構造そのものに驚愕と感動を覚えたであろうことは想像に難くない.

このような時代背景の元, 身近な野生生物である昆虫を対象とした虫類図譜も多数制作されることになった. 虫類図譜制作の本来の目的は, 正確な記録と記述にあったと考えられるが, 博物図譜



図1 Nishiyama Hōen, Procession of Insects, a hanging scroll painting.
Copyright The Trustees of The British Museum.

の表現方法は円山応挙などの職業画家にも取り入れられていった。そして19世紀半ばの幕末期には西山芳園の筆による「虫行列図」のような作品が生まれるに至ったのである(図1)。この作品は、秋の虫たちが、同定可能な程の細緻さで描写されながらも擬人化され、草花を携えて行列を組んでいるという、極めてユニークな構成になっている。この画に描かれている昆虫を中峰が比定したところ次のようであることがわかった：コバネイナゴ、アシナガバチの一種、カマドウマの一種、キリギリス、オオカマキリ(もしくはチョウセンカマキリ)、ショウリョウバッタ、スズムシの7種類。擬人的な表現のため、それぞれの昆虫の後脚の向きは本来とは逆に描かれているが、脚そのものは腿節、脛節、跗節により構成されている点は実物通りである。草花については全てが判明する訳ではないが、アサガオの蕾と実、オミナエシ、ナデシコ、フジバカマ、ワレモコウ、枝豆、カヤツリグサ、ヨメナ(?)、稲穂、エゴノキの実のようなものが描かれている。

本稿では江戸時代に描かれた数多の博物図譜において、その精緻さ故に白眉とされる虫類写生図譜『虫多帖』(1807年-1812年頃)とこれを描いた、伊勢長島藩第五代藩主増山正賢(雪斎)の生命観について考察する。

2. 増山雪斎と『虫多帖』

増山正賢(ましやままさかた 雪斎)(1754年-1819年)は1754年11月27日、伊勢国長島藩主増山正賢(まさよし)の長子として江戸に生まれ、父の死去により1776年、23歳の時に長島藩二万石の家督を襲封した。1801年、48歳の時に家督を長男正寧に譲り、その後は江戸巢鴨の下屋敷で悠々自適の隠居生活を送った。号は雪斎。画は木村兼葎堂に師事し、南蘋流の精緻な写生描写を学んだとされる。

虫類写生図譜『虫多帖』(1807年-1812年頃)は増山正賢の隠居生活の中で描かれた。『虫多帖』は春・夏・秋・冬の四帖の部立てから成り、春の帖にはチョウ目の昆虫、夏の帖にはトンボ、バッタ、セミ、秋の帖はハチ目、ハエ目、甲虫目、チョウ目の幼虫(いわゆるイモムシ)、冬の帖にはカエル、カタツムリ、淡水魚、ゲンゴロウなどが纏められている(山口, 1996)。『虫多帖』に描かれた生物のほとんどは、現代においても正確な同定が可能な精緻さで描かれており、各図には写生した日付と書き入れがなされている。この書き入れは、『本草綱目』や『和漢三才図会』など本草の書物から得た知見を書き添えたという(山口, 1996)。尚、『虫多帖』の一部はデジタルデータ化されており、東京国立博物館のwebサイトで閲覧可能である。以下、『虫多帖』に描かれた虫たちの一部を見てみよう。



図2 Mashiyama Sessai, Chuchi-jo from Haruno-jo. Tokyo National Museum.

図2は春の帖の一枚で、左にオオムラサキの雄、右上がミドリヒョウモン(おそらく雌)、右下がメスグロヒョウモンの雌が描かれている。いずれの個体も翅の斑紋とその色彩のみならず、右上のミドリヒョウモンに至っては翅の欠けまでが極めて精緻に描写されている。春の帖に纏められているチョウとガは全て翅の表と裏の両面を描くという図式が貫かれている。目前にある対象を詳細に観察し、精緻に写し取ろうとする態度は、生物学者のそれと全く同じものであろう。



図3 Mashiyama Sessai, Chuchi-jo from Natsuno-jo. Tokyo National Museum.

続いて図3は夏の帖の一枚で、左上がウマオイの一種、右上がトノサマバッタ、左下がカマドウマの一種の雌雄、右下がキリギリスの雄である。トノサマバッタの生時の飛翔の様子に加え、細かな翅脈まで描き込まれている点は驚嘆に値する。また、右下のキリギリスでは、左の触角を口で掃除する様子が描かれている。この図から、雪斎は生きたキリギリスを飽かずに観察し続けていたことを伺い知ることができる。

続く図4は秋の帖の一部分で、描かれているのはクロアナバチという単独生狩りバチの一種である。クロアナバチはキリギリスの仲間を幼虫の餌として狩るアナバチ科のハチで、『虫多帖』にはまさに毒針で麻酔され、動けなくなったキリギリスの仲間を運んでいる様子が描かれている。クロアナバチの雌は固めの砂地の地面に穴を掘って育房とし、獲物のキリギリス類を運び入れて産卵し幼虫を育てる。雪斎は自身の屋敷の庭でクロアナ



図4 Mashiyama Sessai, Chuchi-jo from Akino-jo, Kuroanabachi (*Sphex argentatus fumosus*), part. Tokyo National Museum.

バチの巣作りを観察していたのではないかと考えられる。

更に、雪斎は写生後に死んでしまった虫たちを「これわが友なり。これを糞壤に委すに忍びず」と、小箱に収めて保存したという(今橋, 2004, p.143)。雪斎が抱いていた小さき者に対する愛情と敬意、すなわち雪斎の生命観は、彼と交友のあった文人たちの心を動かしたものと思われる。その帰結として雪斎の死後、友人らがこの遺志を継ぎ、1821年、下谷中の勸善院に多大な費用支出を伴うであろう「蟲塚」を建立するに至ったのである。尚、この蟲塚は東京上野・寛永寺に現存している。

3. おわりに ー環境共生社会に向けてー

20世紀半ばのDNAの二重螺旋構造の解明以降、分子生物学は隆盛を極めた。分子生物学の発展は、生命現象における分子機構は生物種の間で大きな差異は見られないことを明らかにした。すなわち我々ヒトと昆虫が生物としてほとんど同じ仕組みで成り立っていることを示している。この生物としての共通性を知り理解することは、我々が決して特別な存在ではないことを認識し、我々ヒトもまた進化の結果発生した生物種の一つであるという謙虚な眼差しを持つことに繋がるだろう。

ここで先の雪斎の「これわが友なり。これを糞壤に委すに忍びず」という言葉が想起される。現代に生きる我々が、ほんの少しでも雪斎が抱いていたであろう、小さき者に対する愛情と敬意を持ち得れば、虫たちだけでなく我々人間もまた、豊かに生き生きと暮らせる世界が広がるのではないだろうか。

参考文献

今橋理子『江戸の動物画 近世美術と文化の考古学』東京大学出版会(2004年) p.143

国立国会図書館 電子展示会「描かれた動物・植物 江戸時代の博物誌」
(<http://www.ndl.go.jp/nature/index.html>)

東京国立博物館 (<http://www.tnm.go.jp/>)

森恵桐子「国産初の本格的な顕微鏡『エム・カタラ』」『札幌医科大学標本館だより』第36号 2008.
(<http://www.sapmed.ac.jp/medm/7-36-2.html>)

山口泰弘「増山雪斎『虫多帖』-研究ノート」『ひる・ういんど』第51号 三重県立美術館 1996.
(http://www.pref.mie.jp/BIJUTSU/HP/hillwind/hill_htm/hill51_4.htm)

-
1. 日本にはハタケノウマオイとハヤシノウマオイの2種が分布しているが、これらの外部形態はよく似ており、外見からは区別ができない。ただし鳴き声が異なるので別種とされている
 2. 雌1個体のみで狩りをし、幼虫を育てるハチのこと。有名なスズメバチ、アシナガバチなどは女王とその娘たちによる集団を築くため社会性狩りバチと呼ばれる

(平成22年9月24日受付)